短 報 (Short Notes)

コノハズクの岩手県越冬例

山 本 弘

岡薫高氏により東京都と神戸市に於いてコノハズクの越冬数例が確証され²⁾、感銘を得たが、コノハズクは日本全国で越冬するとされる同氏の考え方²⁾に対しては、黒田長久博士の見解¹⁾と同様に疑問を持っていた。

ところが計らずしも本年 (1964)、本州北端に近い岩手県宮古市で越冬 2 例を知り得たので、これを報告する。

それは雪に追われて人家に迷入したらしいものであるが、本年は岩手県の多雪地帯には雪少なく、反対に例年殆んど雪の無い沿岸に大雪があり、2月9日夜から11日朝まで降り続いて、宮古市内でも積雪 70cm に及んだ。

(a) その 14 日、市内の剥製店に小型ミミズクの死体 4 個があり、みな此の大雪で市内周辺人家の物置き等へ入ったものの由であったが、そのうち特に小型の 1 個は斑紋がコノハズクに相当するので、虹彩を見たところ黄色であった (写真 I)。(他の 3 個はオオコノハズク)。

(b) 翌日同店にまた 1 個コノハズクの死体が来ていた。(a) は大形で翼長 158 mm, (b) は 145 mm. であった。

写真 1. 宮古市で人家に迷入した (a) の個体) 飛去したのを見た。筆者はオオコノハズクの飛ぶのを知っているが、更に著しく小形であった。とはいえ、コノハズクと為すべき十分な証拠は無い。

なお翌朝、窓ぎわの柳の下の方の雪の上にアトリの羽毛がちらかっているのを発見したが、夜中に小雪が降ったので足跡は見えなかった (写真 II)。

(a・b) の内臓を要請しておいたが、誤って焼き捨てたとのことで、食性については何の実証も得られなかった。

しかし此の点では岡氏の研究²⁾と一致しない環境条件がある。

即ち宮古は海流の影響で冬の到来が遅いのであるが、それでも昆虫は 11 月で殆んど

姿を消し、12 月には其の当初、アキアカネ及びエゾイナゴを少数見る年がある程度で、フユシク類及びツマグロオオヨコバイも 12 月に入れば殆んど見られなくなる。これは鳥類のほか筆者は昆虫類の出合い記録も 1950 年以来努力して継続している結果から明らかである。

一方モズの早にえは、筆者横浜在住の頃、屢々見てよく知っているが、宮古では 1 度も見たことが無い。

宮古ではモズは蕃殖もあり、越冬もあって、本冬閉伊川下流地域で越冬したモズは、胸や脇が異常に赤い特徴豊かな 1 羽なので、その勢力圏が少なくとも東西 3 km、南北 2 km の範囲に亘る低地一帯に及ぶことも知り、またその冬期の食餌は主として川辺の小動物らしいことも知り得たが、確認したのは晩秋の頃、木の葉の堆積の下から引き出したミミズ及びアマガエルであった。

何れの場合にも早にえは作らず、大きいアマガエルでも夕刻までには食い尽した。

此のモズは 1 月以来グゼリのほかには殆んど声を立てず、体色は漸次蕃殖期のそれに変って来たが、特徴は失なわず、3 月下旬、まだそのまま滞留している。やはり早にえは作らない。

以上により宮古地方越冬のコノハズクの食餌は、昆虫やモズの早にえ等ではないと思われる。

モズと同じ食餌も考え得るが、たとえモズが小動物のみで越冬したとしても、広い地域によりやく 1 羽越冬する程度であるから可能性は少ない。しかも例年雪は無くても、潮汐の影響を受ける個所以外は約 3 個月間凍結し続ける地域であるから、カエルや昆虫を地中から掘り出すことも困難である。

しかしスズメやアトリ科冬鳥の多い場所であるから、(c) を度外視しても小鳥や小獣類が主食であるということだけが合理性を持つ。

翼長では、上記の如き値が若し地域の特徴とすれば、コノハズクは地域留鳥の疑いも出て来るわけだが、2 例だけでは此の論議は早すぎる。

写真 II. 雪の上に散乱した
アトリの羽毛

引 用 文 献

- 1) 中村幸雄 (1962): 岡董高氏のコノハズクの論文に寄せて——鳥 79/80: 225-226.
- 2) 岡董高 (1962): コノハズクの越冬——鳥 79/80: 222-225.

Yamamoto, Hiroshi: Winter Records of Scops Owl, *Otus scopus*, in Iwate Prefecture.

Two specimens of Scops Owl were obtained in February 14 and an owl, probably the same species, was observed in March 1 1964 at Miyako City, Iwate Prefecture. It may be further evidence for Oka's view that the owl is resident in Honshu.

コノハズク・オオコノハズクの生態と擬態について 山 本 弘

標記の問題に関しては従来あまり報告がないようであるが、昨年来筆者はやや機会に恵まれ、ある程度の示唆を得るに至ったので報告する。

(上)
正面図
黒点密度は明るさの
概要を示す

(下)
平面図

写真 I. Fig. 1. オオコノハズクが入った薪小屋の内部

1. 薪小屋へ入ったオオコノハズクの観察

3/II, 1963 朝, 岩手県宮古市八幡前の筆者宅の薪小屋にオオコノハズク 1 羽が入っているのを発見した。此の鳥は 3 日昼・夜・4 日昼と居て, 4 日の夕方に出て行ったが, 其の間, 脱糞したのみでペリットは吐かず, 声も立てなかった。

それは一見生きた鳥らしさは少しも無く, スズメバチ科の蜂の巣のようであったが, 鳥の居た位置がまた低い, しかもやや明るい場所なのも意外であった (写真 I・Fig. 1)。

鳥は耳角は立てていたが, 羽毛はぴったりと身につけ, 人が小屋の中へ入っても眼を閉じたまま動かず, 恐ろしい蜂の巣をよそおい通さんとするかに見えた。しかし写真で見ると実はうす眼で見ていたらしい (写真 II)。

横向きを撮影すべく鳥体に手を触れたところ, 忽ち羽毛を立て, 嘴を鳴らし, 眼を見